

優秀修士論文概要

民話伝承における声と文字

——山形県南陽市「民話会 ゆうづる」を事例として——

廣 田 里 咲

1. 序 論

口頭のみでの民話伝承が途絶えつつある今、文字を用いた民話伝承が基本となっている。本研究では、文字による記録をたよりに、地域の民話を声にして語る人々が、文字による記録とどう向き合い、どのような姿勢で語り継ごうとしているのかを明らかにすることを目的とする。また、本研究で調査協力を依頼した「民話会 ゆうづる」では、文字とは単なる記録媒体に留まらず、研究者の手によって記録され研究された学術的な知でもある。民話を語る人々と文字との関係を明らかにすることで、学術に対する人々の認識のあり方をも浮かび上がらせることができると考える。

2. 先行研究

民話の語り手に関する研究では、物語を幼い頃に耳から聞いて覚えた「伝承の語り手」と、文字で覚えた「現代の語り手」とは区別されているが(杉浦 2017: 32)、これまで野村純一らによって蓄積されてきた語り手に関する研究の中心は「伝承の語り手」であった。一方の「現代の語り手」に関しては、まだ十分に研究が蓄積されているとはいえないという指摘がある。例えば鶴野祐介が「これまで昔話の研究者の多くは……(中略)……『現代の語り手』については等閑視してきた」(鶴野 2023: 190)と述べている。2023年時点で、このような発言がなされていることから、「現代の語り手」に関する研究は未だ発展段階であることがうかがわれる。「現代の語り手」の研究で注目すべき点の1つになるのは、文字を読んで物語を覚えているという点である。語り手と文字との関係を重視する研究者も複数おり、例えば高木史人(1995)や三浦詩織(2011)が挙げられる。文字を読んで物語を覚えているという点に関しては、語り手論の中で触れられることは少ないが、ストーリーテリングという、文字で物語を覚え、図書館などを中心に語り聞かせる活動も存在している。

3. 調査地概要

「民話会 ゆうづる」は山形県に存在する「夕鶴の里」の専属民話会である。「夕鶴の里」は山形県南陽市漆山地区に平成5(1993)年に開館した施設であり、資料館と語り部の館という2つの建物からなっている。「民話会 ゆうづる」は平成3(1991)年に結成されており、2024年時点で13名(女性11名、男性2名)が所属している。この13名が日替わりで語りを担当しており、来館者は漆山地区にある鶴布山珍藏寺の縁起譚「鶴の恩返し」を筆頭に、様々な地域の伝説や昔話を現地の方言で聞くことができる。

筆者は2024年7月から8月にかけて、断続的に座談会と「語り部養成講座」による調査を行った。それ以外にもイベントや個人的な観光で訪れており、その度に語り部の方々と少し交流する機会があった。

同時に、南陽市立図書館と山形県立図書館で文献資料の調査も行っている。座談会では同意のもと録音を行っている。それ以外の「語り部養成講座」や個人で訪れた時の記録は、ノートでの記録を元に再現している。また「民話会 ゆうづる」では物語を語る人（語り手）のことを「語り部」と呼ぶため、「民話会 ゆうづる」に所属する語り手の方々のことは「語り部」と表記する。

4. 調査結果

4.1 物語群の分類の捉え方

「民話会 ゆうづる」において、昔話と伝説はそれぞれ、「昔話」と「伝説民話」という言葉を用いて区別されている。「伝説民話」とは特定の地名が出てくるものであり、かつ、変えてはいけなものとされている。それに対して「昔話」には、そのような決まりはない。この「昔話」と「伝説民話」の区別は、柳田國男をはじめ民俗学でなされてきた昔話や伝説の定義と概ね一致する。しかし、「民話会 ゆうづる」では、「伝説民話」という言葉が、研究者によって用いられる「伝説」とは少し異なる捉え方をされている様子が座談会では見られた。「民話会 ゆうづる」で語られる伝説民話とは、何よりも「地元の話」なのである。地元の話であるために、地元の地名・人名が物語中で語られる。その結果、特定の地名・人名が登場するという特徴が生まれている、と解釈されていた。

4.2 物語を覚える

「民話会 ゆうづる」の語り部は「現代の語り手」であり、本を読んで話を覚えたという自覚がある。ただ、本に記録されている物語は口承の物語をそのまま文字で記録したものであり、口承と書承は連続したものだと捉えていた。そして、完全に書承である訳ではなく、口承の側面も未だに残っていた。例えば、他者の語りの表現を良いと感じて、自分も同じ語りの表現をしようと思ったという話を複数人から伺った。他にも、「耳から聞いた方がよく覚えられる」という意見もあった。語り部の人々は、自分たちは物語を文字で覚えていると自覚していると同時に、耳で聞く音にも深く影響を受けている。

4.3 民話を語る

民話を実際に語る時、重要な要素の1つが方言である。「民話会 ゆうづる」の語りにおいて、標準語で語ることによる意味のわかりやすさは優先事項ではない。方言で語ることによって伝わる地域性が、わかりやすさよりも大切にされていた。

また、方言以外の民話を語る際に重要な要素が、臨場感である。臨場感を生むためには、自分たちが長く住んでいる地域内であっても、改めて伝説の伝承地へ足を運ぶことが重要であると語り部の人々は言った。知っているはずの自分たちの地域に意識を向け、見つめ直すことが、民話の臨場感を聞き手に伝えるために重要なのである。

4.4 研究者の介入

「民話会 ゆうづる」において、「文字」と研究者とは密接に関わっている。特に関係が深いのは、山形県の民話集を多く編纂している民俗学者の武田正である。彼の名前は座談会で何度も口に出された。彼は、「民話会 ゆうづる」では、「南陽市を代表する伝説民話は『鶴の恩返し』『白竜湖の琴の音』『双生の松』である」や「観光民話は、本当の語りとは違う」という考え方に影響を与えていることがうか

がわれた。しかし、「観光民話は本当の語りとは違う」という武田氏の発言を知っていながら個人個人の語りを尊重する発言も聞くことができたため、彼の考えと民話会の解釈とが完全に一致しているわけではないこともわかった。

5. 考 察

現在の「民話会 ゆうづる」における語り活動の基礎は文字資料であり、文字資料から活動が始まっている。ただ、口承と書承という営みは全く別のものとして捉えられているわけではなく、書承の物語は口承の延長線上に位置づけられている。そして山形県における民話の文字資料は、主に研究者の手になるものである。しかし、研究者による文字資料を基盤に行われている語り活動は、必ずしも文字や研究者によって作られた基準に沿っているわけではないことが、個人個人の語りが尊重されていることや、「伝説民話」の定義からうかがわれた。

語りの活動だけでなく、語りを行う上で彼らが聞き手に伝えたい「この話は地元の話であるという語り部の実感」を得るための営みも、文字資料から始まる。文字で記録された民話を読むことで、語り部はこれまで意識していなかった地元の一面に気付く。また、研究者によって整理された地元の民俗や歴史に触れることで、語り部たちは、地域の民話に描かれる人々の営みが過去からこの地域で続いているものであると感じられる。この知識と経験は、語り部が「地元の話である」と自信を持って来館者に対して語る根拠となる。語り部たちは、空間的には身近な地元にある伝説の舞台へ足を運び、見過ごしていたものを見つめ直し、「わたしたちの話である」と実感して、知識と実感を織り交ぜて聞き手に語りを行っている。

以上のように、研究者による文字資料を手がかりに、語り部は物語が「わたしたちの話」であることを実感し、それを人々に語る。研究者という後ろ盾は、外部からの来館者に向けて語る「わたしたちの話」が本当に彼らのものであることを保証している。語り部の語りの中心になっているのは、何よりも「わたしたちの地元で起こった話である」という実感である。そして、その実感をより良く聞き手に伝えるために、文字資料や学術的知識は「自分たちの地元で起こった話である」という語り部の実感に沿って再解釈されて語られるのである。

6. 結 論

本研究では、民話伝承における声と文字の関係に注目し、山形県南陽市を中心に活動している「民話会 ゆうづる」を対象に文字や学術的知識と語り活動の間にある関係を分析した。その結果、文字として記録された民話や体系化された学術的知識を語り部が機械的に暗記して語りに反映するという一方的な関係ではなく、語り部が自らの活動や体験に沿って再構築して民話や学術的知識を語るという相互補完的な関係にあることが確認された。この相互補完的な関係で中心的な役割を果たしているのは、「自分たちの地元の話だ」という語り部の実感である。本研究で明らかになったことは、現代の民話伝承における書承と口承の関係や役割を再評価するための基盤となるであろう。

一方で、研究者によってもたらされた知識と語り部の関係を考える際、調査者である筆者自身の影響を忘れてはならない。今後も語り部の方々と交流していくうえで、自分自身の影響を自覚して観察していかなければならない。

参考文献

- 鶴野祐介（2023）『うたとかたりの人間学 いのちのバトン』青土社.
- 杉浦邦子（2017）「現代の語り」『こえのことばの現在 口承文芸の歩みと展望』日本口承文芸学界編、pp.29-44、三弥井書店.
- 高木史人（1995）「昔話の語り手」の一九〇〇年 —「数百話クラス」の語り手の誕生』『口承文芸研究』第18号、p.53-72、口承文芸学会.
- 三浦詩織（2011）「テキスト化する伝承：ムカシコとストーリーテリングの語りから」『文化／批評』3号、pp.52-77、国際日本学研究会.